西日本新聞

2023年
5月16日
（火曜日）

中村哲 最期の言葉
希望の一滴
人気の一冊 10刷出来！ 西日本新聞社の本

春秋

2023.5.16

〈新茶の香真昼の眠気転じたり〉。その香りは、まどろみを覚まさせるほどの芳醇さだったのか。詠み人は小林一茶。この時季、薄い若葉色の新茶をすすり、香りをゆっくり楽しんでいる方も多いだろう▼緑茶は近年、海外への輸出量が増えている。健康志向の高まりを追い風に輸出額はこの10年で4倍に急増した。うち半分を占める得意先は米国で、抹茶を含む粉末茶が大人気だ▼抹茶が「MATCHA」としてこれほど世界で愛される存在として成長するまでには、進取の気性に富んだ長崎人の活躍があった▼1980年代前半、長崎の老舗製茶会社の次男、前田拓さんは28歳で渡米し、現地で会社を設立する。日系スーパーや日本食レストランとの取引で販路を拡大。本格的な抹茶アイスクリームを商品化し、米国から日本へ逆輸出すると多くのメーカーが追随した。西海岸に開いたカフェで売り出した抹茶ラテも人気を集めた▼日本食ブームにも乗って抹茶は世界へ。前田さんが編者を務めた本「抹茶革命と長崎」（長崎文献社）は、市場開拓の道のり、長崎と茶にまつわる専門家の論考を収めている▼茶の輸出の先駆けは、幕末の長崎で活躍したお慶さんこと大浦慶。嬉野をはじめ九州一円から茶葉を集めて世界へ送り出し、明治初期の日本の経済成長を支える特産品となった。日本茶の味と香りはそのころ、世界の人々のDNAに刻み込まれたのかも。